楽しい絵本の読み方講座

2007年４月27日発行

鶴川第三小学校読み聞かせの会編

はじめに

ようこそ読み聞かせのボランティアへ。

ここに‘　東京都子ども読書推進資料２００３　子ども達に物語の読み聞かせを　’からの抜粋を載せます。

子どもに読み聞かせをする事は、心に種をまくようなものです。すぐに目に見える効果はなくても、いつか種から芽が出て、葉を茂らせ、花を咲かせます。そして大好きな身近な大人の人に読んでもらった楽しい一時は、その声と共に深く子どもの心に根を下ろし、その子の生涯を支えてくれます。

私たちが読み聞かせをする所以です。

私たちの会はお母様方によるボランティアで行われているため、活動に難しい規則はありません。ですが大勢の子ども達の前で本を読むのですから初めての方はどきどきしますね。そこでちょっとだけそのコツをお伝えします。

でも一番大事なのは　お母さん達が楽しんでいること。楽しい本だよと伝える気持ちです。

絵本の選び方

基本的にお母さんが子どもに読んであげたい本でいいのです。お願いは・・・教科書に載っている本は読まないで下さい。（先生方からの依頼です。）１年では「おおきなかぶ」　２年「スイミー」などなど

そして出来れば　**読む本は誰にでも手に入るものを。**本は学校の絵本室（２Ｆ）図書室（３Ｆ）から自由に借りられます（借り方・・・図書ノートに記入していただきます）。自分でもう一度読みたい子のために読んだ本がどこで手に入るかを教えてあげてください。

→本好きの子になります！子どもは読んでもらった本を覚えてくれています。

もう一点。そのときの季節、行事にあった本はこどもの心に残ります。

以下にもう少し詳しく記しておきます。

ストーリー

＊低学年ほど起承転結のしっかりしている本を。ストーリーのはっきりしない本は飽きてしまいます。

＊また名著名作といわれる本でも、訳によっては子どもには魅力がわからないものもあります。

（外国の本は訳の仕方によっては読みづらい本もあるので御確認を。）

＊話の長さ、字の多さ

これは担当学年の先生との相談や子どもの反応を見て決めたほうが良いでしょう。

＊ぐるぐるばなし（同じ内容の繰り返し）は子どもにとって楽しい本です。

絵について

＊絵が難解でないこと。近づいてじっくり見なければわからないような本は、大人数の前では避けたほうが良いですね。

＊「きれいきれい」な絵より「きたな～い」絵のほうが好まれたりする事もあります。大人受けする本と子どもに人気のある本が違うことってあるのですよね。

＊「絵本全体が一つの作品だ」と思わず感動させてくれる本に出会うことがあります。

表紙から裏表紙まで工夫されているのを発見する事は読み手にも子ども達にも楽しいものです。子どもは結構気づきます。→本番のところでもう少し説明します。「ぼくはあるいた。まっすぐ　まっすぐ」

言葉の味わい

＊言葉のリズム、雰囲気など

いろいろ読み比べてみてください。特に声に出してみると随分違います。

＊古典や昔話は類書を見比べて！（昔話は採話によってエンディングなどもかなり違う事がありびっくりしますよ。更に挿絵でイメージが大きく変わってしまうものも。）

「赤ずきん」「おだんごぱん」など

自分が読み（演じ）やすいか

作品を手にとって読んでみて読みやすい、親しみの持てる本が一番です。本との間にも相性があるのですね

読み方

そんなことよりももっと大切なのは、そのような作為を捨て去った後に残る、いかにもその人らしいありのままの言葉づかいや行動、物腰、しぐさ、表情といったものであろう。ありふれた場で、ありふれた形でさらけ出されているありのままのその人の姿こそが、子どもの日々に大きな影響を与えていくのである。（『豊かな言葉の教育』明治図書２３５頁）

上の言葉の通りなのですが、心配な方に・・・・・

さて　読む本が決まったら早速　**実際に声に出して読んでみてください。**声に出して読んでみると間の取り方、会話をおのずと工夫している自分に気がつくでしょう。また、練習をしておくといざ子どもを前にしても緊張の度合いが減ります。

事前にしておくこと

●本のカバーをはずしておく。（読んでいて持ちづらいので。）

●本の開き癖を付けておく→新しい本は開きにくいので、両端にいる聞き手に絵が見えにくくなります。読む前に１ページずつしっかり本を押して開き癖をつけておくといいでしょう。

開き癖のつけ方は、表紙からと裏表紙から、交互に１ページずつ開いていきながら丁寧に押さえてつけます。こうするとどのページも均等に癖がつきます。古い本は汚れなどがないかチェックしておくのも大事です。本を持つ練習。本は自分の体の右か左（楽なほう）に持ち片手で支えます。（この際自分の顔、髪の毛、めくりの手で本を隠す事がないように。体は聞き手に対して斜めにすると楽です。）

●勿論　実際に声に出して練習。

本　番

教室に入って　子どもが読み聞かせの体制に入っていないときは、これから読み聞かせを始める事を告げます。静かになってから始めますが、子どもが集中して聞けるよう**環境設定**に気を配ってください。

子どもの見やすい位置に・・・子どもがいすに着席する場合は立って読むほうが良いでしょう。子どもが前に集まって床に座ってくれるときには読み手はいすに座って読むと良いでしょう。光、照明に注意。立ち位置が窓際にならないように。→（逆光）照明の下には立たない。→（影）本によっては反射して絵が全く見えなくなる本もありますから注意してくださいね。まず子どもに絵本がちゃんと見えるか確認してください。（読み始めて「見えない 。」 といわれないために 。）

①　表紙を見せて、タイトルと作者、画家の名前を読む。

最初、本の表紙をじっくり見せてタイトル、作者名、画家名を読み上げてください。表紙絵が大事なインパクトを与えます。それから見返しも見せてあげてください。（もう本の内容は始まっています 。） そして本文のタイトルを読みます。表紙で作者名を読んだ場合、ここでは読まなくてもよいですが絵自体はしっかり見せてあげてください。

＊子どもに話しかけられても、目で応え、声は出さないで。子どもの質問に答えるのは、質問攻めになってお話どころではなくなる場合もあるという事を覚悟しておくとよいでしょう。内容がしっかりしている本は、難しい言葉が出てきてもなんとなく通じるものです。あまり神経質にならず、本の力を信じましょう。（昔話や外国のお話で、日常生活では馴染みのないモノや言葉が出てきたとしても、ストーリーの展開上、説明しないとこの先ストーリーがわからないことでない限り、読み進めていくほうがいいでしょう 。）

読んでいる最中は**本の世界を壊さないようにすることが第一です。**

②　ページをめくる

ページをめくるときは、胸の横に本の端を当てて支え、片手で本の下中心を持ち、もう片方の手でページの下端を持ってめくるとグラグラしません。

めくった直後は聞き手の視線が絵に集中します。本文を読むのは一息待ちましょう。ただ、スピード感のあるページでは、その限りではありません。そこは臨機応変に。

めくりのコツは一ページ先に指を差し入れることです。（上級）→文末だけでもしっかり覚えておき、ページをめくるとき子ども達の表情を見ながら語りかけるという技もあります。

③　後ろの見返しも見せる

本文が終わったら後ろの見返しも飛ばさずしっかり見せましょう。何かが見つかるときもあります！

④　裏表紙を見せる

余韻を持たせてゆっくりと「おわり」または「おしまい」と言って締めくくります。　裏表紙も最後までしっかり見せましょう。特に裏表紙まで物語が続いている作品は、必ず見せてあげてください。　「はじめてのおつかい」

⑤　最後にもう一度表紙を見せる

子どもがもう一度タイトルに接する事が出来るように　再び表紙を見せて、タイトルを言いましょう。表紙と裏表紙がつながった絵になっているものもあります。そういう本は最後に開いて見せてあげましょう。そしてこの本がどこでもう一度借りる事が出来るのか教えてあげてください。

読み終えたとき、**感想を聞かないであげて下さい**。感想を言わなくてはというプレッシャーで、子どもは本を楽しめなくなる場合があります。ひとり余韻に浸っているかも。わざわざ言いに来てくれる子もいますが。読み聞かせの醍醐味ですね。

最後に

色々と書き記してきましたが、最初からこれだけのことを全てマスターして読み聞かせに望もうなんて不可能なことです。追々やっていく内に自然と身についてくるでしょう。

一番大切なのは読み手自身が楽しんで本を読むという事です。

付録　<u>子どもをひきつける技</u>

① 間のとり方　慣れていないと早口であっという間に読んでしまう事はありますがあえてゆっくり読むように心がけてみてください。またこの「間のとりかた」を会得すると読み聞かせで子ども達をひきつけるのに有効です。

１、重要な部分の「前」「後」では、しばらく沈黙する。（「間」をとる）。

２、子どもを集中させるには「びっくりするぐらいの間」をとる。こちらを見ていなかった子も関心を向けてくれます。

３、題名と本文の間は、「間」をとる（この題名からはこんな内容かなと考えさせることができます。）

４、話題が変わる部分に、「間」を取る。すこし気分を変えて読むと良いかもしれません。

＊絵本を読むときに子どもと視線を合わせるかどうかですが、一度目をあわせてしまった子どもはまた目をあわせてくれるかと期待が生まれてしまい絵本への関心が薄れてしまうことがありますので注意が必要です。「間」を取るときに全体を眺める感じで子ども達のほうを向くと良いのではないでしょうか。

②　声による表現　教室の隅の子が聞こえる声で読みましょう。（大きな声が良いとは限らない。）また「おーい、おーい」というような呼びかけは、**大声を出す必要はなく、感じが出れば**それでよいのです。口を少し大きく開け、はっきり発音し、聞き手が内容をイメージできるくらいにゆっくりと読むようにすると良いでしょう。

上級編です。会話文は少し大きめの声で、地の文は少し小さめの声で読むと変化が出ます。更に会話ではそこにこめられた心情を考えて読むと登場人物たちが生き生きしてくる事でしょう。